

■ワークショップ

ワークショップでは、2グループに分かれて、魚に関わる文化や食文化、生き物の環境の現状と今後をどう考えるかについて話し合いました。

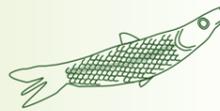
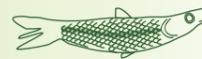
伊庭の水辺の生き物、暮らしー昔話編

- ・「大雨が降った後に井川（ゆがわ）や川に行けば、魚がいっぱいとれた」
- ・「イシビシヨはどこにでもいた」
- ・「金毘羅さんのところでみんなボテ釣りをしていた」
- ・「ドチマン、ナマズ、ゲギなどは石垣のところによくいた」
- ・「カワでモロコを釣っていた。さし虫、米粒などをえさにした」
- ・「泳ぎに行ったらシジミを取って帰るのは日課だった」
- ・「漁師が90軒くらいあった」
- ・「圃場整備で井川（ゆがわ）を失って家庭でオカズトリをしなくなった」
- ・「鯉ゾーンを作るときは、雨森を参考にした。これで泥が無くなって、水はきれいに見えるようになった」

伊庭の水辺の生き物、暮らしー今

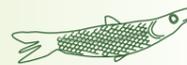
○ 魚と食文化

- ・「食文化はもともと伊庭内湖というより、沖島などを含めた琵琶湖全体のものだった。これからは琵琶湖全体で考えたほうがよい。」
- ・「魚屋は少なくなったけれど、あるのはある」
- ・「炊いてある魚を買うことが多くなったように思う」
- ・「モロコは今でも家庭で調理している」
- ・「シジミ、コイの煮付けが好物だった」「フナの子付けの造りが美味しい」
- ・「仕出し屋さんが減っている。4軒から1軒に。」



○ 川の環境活動

- ・「小学生の環境学習の一環として、ニゴロブナの稚魚を水田へ放流している」
- ・「水路は各町内で掃除をしている」
- ・「コイの放流あたりから住民の感覚が変わってきた」
- ・「2年前に子供たちが妙金剛寺川で魚つかみをした。子供たちが生き活きとして、とてもよかった。」
- ・「目地を埋めた石垣は、見た目はきれいかもしれないが、魚の住処にはならない」
- ・「もともと水路も石垣も生活のためのもので、だから残ってきた。今も防火水槽のように使っている」
- ・「美味しい料理があっても、地元には魚がないのはさみしい」



伊庭の水辺の暮らしーこれからの課題

- ・「川の魚はめずらしいが、調理法を工夫して、もっと好きな人を増やすべき」
- ・「湖魚料理はもっと気軽に食べられるようなメニューができればよい」
- ・「伊庭には魚がいる、ということであらためて知ることや、その環境をつなげていくためにも、魚つかみなどのイベントをやっていくことは大事だと思う」
- ・「こどもの遊び場として川を見直したい。大人にとっても学習の場、行きたくなる場所にできれば」
- ・「ガードレールはいらない。もっと花を綺麗に思う人が増えるといい」「自己責任でいいのでは」
- ・「これからの石積みの修繕は課題。特に緊急性のあるものを把握する必要がある」
- ・「どうしても、という思いが無ければ残せないもの」
- ・「補助事業なんかの活用も考え、取り組みを共有する仕組みが大事」「モデル事業のころは1人500円出して環境活動に使った」
- ・「相談窓口もふくめて、組織づくりが課題」
- ・「外から来訪者がきたときに、地元還元される仕組みをつくる必要がある」「針江は参考になる」
- ・「川魚料理があるのは強み。針江以上になるかも。」
- ・「伊庭桃も特産物として可能性がある」



○ 問い合わせ先

- ・東近江市都市計画課 TEL:0748-24-5655
- ・京都大学景観設計学分野 〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 C1-1 TEL:075-383-3329

白熱した議論が交わされました！（高林）次週のワークショップのテーマは水路の石垣の保全です！（三輪）

